編集後記：編集委員を始めてから2年が過ぎた．事務局当番ということで，原稿の校正作業のお手伝いをしている．誤字脱字や図表のチェックなどが主な仕事になるが，慣れるまでは一苦労であり，今でも稿を重ねてから修正漏れに気づくことが多々ある．

「天気」は科学論文雑誌なので，事実を書き連ねた論理的な文章が展開しているわけだが，当然ながら語句の使い方，言い回し，句読点の打ち方等々，著者の個性が随所に表れていて，毎回の作業でささやかな発見がある．「センサー」は，工学系ならば「センサ」と書くのが普通らしい．漢字や送り仮名の使用には，年代による違いが若干みられるようだ．例えば，「行う」と「行なう」など．また，比較的新しく，門外漢には馴染みのない専門用語のカタカナや英字表記，略語も，著者によって違うことがよくある．そうした用語は，オンラインジャーナルなど専らインターネット上の検索で一通り確認する．

このように一つの事実を表すのに，いろいろな表記方法があると考えさせられたところで，最近では，その逆に気づかされることもある．「ただちに影響ない」，「一定のめどが付く」など，耳にタコができるほど聞いたが，その意味は，話し手と受け手と使われる状況によって目まぐるしく変わる．「天気」でお目にかかることはまずなさそうな定型句だと思う．

（大塚道子）